

Title	奥井復太郎の総合観と都市景観論
Sub Title	
Author	山岸, 健(Yamagishi, Takeshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1998
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.3 (1998. ) ,p.45- 49
Abstract	
Notes	特集I I : 奥井復太郎生誕104年記念シンポジウム
Genre	Journal Article
URL	<a href="http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19980000-0045">http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19980000-0045</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 奥井復太郎の総合観と都市景観論

山岸 健

絵ごころを大切にしながら人生を生きた一人の研究者、彼こそ奥井復太郎である。さまざまなスケッチが残されているが、しなやかな感性が画面に漂っている。生活空間の片隅が描かれている。自画像がある。風景画がある。彼は文学作品にも深い関心を示している。生活のなかで日々の生活を楽しむ、こうした態度で人生を生きた研究者によって『現代大都市論』が著わされたのである。

ジョン・ラスキン—ドイツ中世都市—シカゴ学派、こうした流れをたどりながら、私たちは奥井復太郎の研究の展開様相を理解できるが、彼の〈まなざし〉がいつもそこに注がれていたのは、人びとの生活だった。当然のことともいえるが、彼の都市研究は、みごとにまで彼自身の生活史によって貫かれている。こうした生活史が視点とパースペクティブとなったうえで、都市研究の展開が見られたのである。若き日の彼がジョン・ラスキン研究に注いだ情熱は、注目に価する。ラスキンに熱中した彼がイギリスあるいはイタリアでかなりの時を過ごしても少しも不思議ではないのだが、奥井復太郎が留学先に選んだのはドイツだった。ドイツ中世都市の風景とたえずまいによって魅了された一人の若い研究者の視野にコミュニティとコミュニティ・ライフがクローズ・アップされてきたことに注目したいと思う。彼の都市研究は、当初から風景や景観によって動機づけられたり、方向づけられたりしていたのである。

景観が視点とパースペクティブとなった都市生活研究、私たちは奥井復太郎の都市研究のスタイルをこのように呼ぶことができるだろう。彼の都市研究には景観論、風景へのアプローチという色彩が全面的に漂っている。『現代大都市論』においては、特にこうしたことが明瞭に認められると思う。だが、彼の都市研究の基本的特徴は、そうした研究がなによりも生活論として理解されるということではないだろうか。奥井にあっては、都市理解の鍵となるのは、ことごとく生活、日常生活なのである。彼の都市研究においては、明らかに生活と生活者が視点とパースペクティブとなっている。そして生活とともに景観が注目されたのである。表現された生活、生活の光景と風景が、奥井復太郎の視野に広がっていたのである。

生活に根ざした景観、社会関係の諸様相が浮かび上がってきているような生活の風景が奥井の都市研究のそこ、ここに姿を見せている。こうした景観や風景は、人間の姿によって彩られていたのである。目に触れた景観や風景が彼自身のアイデンティティに内面化さ

れていったといえるだろう。奥井には景観や生活情景を見る深い〈まなざし〉があった。こうした〈まなざし〉は彼の絵ごころによるものであったと見ることができるだろう。

時代に応じて、地域や職業や社会階層、生活の状態と様相に応じて、まことにさまざまな景観が見られたのである。奥井復太郎においては、景観は環境と生活との統一として理解されたのである。

生活の地平に姿を見せるもの、生活の領域として理解されるもの、それが都市だったのである。生活者の姿と表情、行動のパターン、服装などが奥井の視野にクローズ・アップされてきている。生活態度や生活理念などに彼が注目している。都市の理解は、人間の理解や生活の理解とひとつになっていたのである。

ドイツ中世都市に多大の興味関心を示した奥井が特に魅せられたのは、その姿かたち（彼は形体という）、建築、設計だった。こうした都市の姿かたち、景観、広場やストリート・パターン、光景、風景は、みごとにまで集団生活、コミュニティを具現していたのである。ラスキンが念頭にあった奥井にあっては、自然美を謳うラスキンの観察解釈がそのまま自分自身の中世都市観になっていたものであり、ラスキンをふまえた中世都市観が奥井の総合観の基底となっていたのである。

『現代大都市論』の第三章は、「大都市の地域的構成」と題されているが、その第二節は、「地域・景観・社会」というタイトルの節である。もうひとつ言葉を加えることにするならば、当然、生活という言葉が浮かび上がってくるだろう。この第二節の内容とほとんど同じ内容の文章が、『都市経済論』の第二編、第二章、「都市社会学」の第三節、「地域と景観・其の社会学的意義」に見られることを指摘しておきたい。景観においては全体的統一と調和に美が見出されることはいうまでもないことだが、奥井は自然美から都市美に導かれたのである。「地域・景観・社会」、こうしたタイトルに私たちは彼がいう総合観の一端を見出すことができるだろう。社会という言葉は、社会生活、社会関係、人間、人格、パーソナリティなどといった言葉がつぎつぎにそこに姿を見せる言葉なのである。

地域の特殊性を示すために用いられる標識として奥井が挙げている項目は、つぎのとおりである。——人口、建物、経済的活動、富力、移動性。『現代大都市論』の第三章、第二節に見られるつぎのような言葉に注目したい（奥井 1996, 260-261頁、ここでは旧かなづかいを新かなづかいに訂正）。

斯くの如く、地域の持つ特殊性を指示すべき標識を悉く列挙する事はここでは不可能である。要は是等の事象に示された様に、各地域が特殊な生活者と特殊な生活力と、従って特殊な生活様式と理想とを持っている事が明かにせられたい。其の結果、各地区は独自の生活様相と生活理想とを持ち、ここに独特の空気が醸成され、斯くして此の地

区が別天地を構成する。此の小天地は居住者にとっては安住の地であり、他者(ヨリモノ)にとっては外国である。(中略)盛り場は大勢の人々を吸収する事を以て成立する土地であるが故、開放的でなければならぬ。勿論、盛り場の雰囲気は封鎖的に保持されねばならぬ。渾然たる空気が其の中に漂っていなければならぬ。併かし、盛り場は其の空気が排他的であってはならぬ。又事実、盛り場の空気は必ずしも排他的ではない。むしろ開放的である。斯かる事情からして都市内部の地域的な型態(この型態という言葉は、『都市経済論』では、文様となっている(奥井1939,99頁))は同時に居住者の行動型ともなり、合せて居住者の心的状態にも通ずる理である。或る論者が都市とは或る心的状態であると言うのは此の意味で、居住者の心理内容が地域的關係によって規定される事を指すものである。斯かる意味に基いて景観の社会学的意義が生れる。

奥井復太郎がいう総合観の様態を私たちはここに見ることができるだろう。見方によっては、こうした総合観は、景観論に集約されるといえるのではないだろうか。総合観は生活者である人間と生活へのアプローチによって貫かれているのであり、地域というスケールで総合観の展開が試みられているのである。

地域的封鎖性や排他性が指摘されるような地域/別天地があるのだが、独特の雰囲気がそこで体験されるような開放的な盛り場があるのである。

都市をある心的状態と呼んだのは、パークである。ベルギーのブリュージュが小説のまるで主人公となっているような作品、『死都ブリュージュ』につぎのようなシーンがある(ローデンバック1892[1988,112-114頁])。「とくに町々には、それぞれ一つの人格、自主独立の精神があり、喜びや新たな恋や、断念や寂しいやもめ暮しと通じあうような、ほとんど表に現れ出た性格がある。あらゆる都市は一つの精神状態であって、その都市に滞在するようになると、すぐにこの精神状態は伝播し、大気の色合いと溶けあう液体となって、われわれに感染し、ひろまっていく」。この小説は深い悲しみに満ちあふれた哀切きわまりない感傷的な作品だが、ブリュージュの景観と表情と雰囲気の描写と表現は、まことにみごとである。

永井荷風について述べたとき、奥井復太郎は、景観、人間の集団生活、人間のパーソナリティ、この三つが三位一体の形をなしていることに言及し、こうした点に都市社会学の研究のひとつのテーマを見出している。土地柄と人柄と心柄—三位一体的関係はこれらのあいだに見られるのである(奥井1959,25-27頁)。

都市景観に注がれた奥井の〈まなざし〉には並々ならぬものがある。私たちは都市研究の場において都市美が彼のモチーフのひとつになっていたことを見落とすわけにはいかな

いだろう。奥井の総合観には美的な感覚ともいうべきものが見られるように思われる。

『現代大都市論』（昭和15年）、『都市経済論』（昭和14年）に先立ってプリントされているエッセイだが、「都市生活と景観・都市美」と題された9ページにわたる小論文がある。文章の末尾には、昭和12年4月13日稿、と記されている。このエッセイの文章は、つぎのような言葉で結ばれている（このエッセイがどのような機会にどこにおいて発表されたものであるのか、現在のところ不明である。活字化されたプリントが残されている）。  
—「よきにつけ、悪しきにつけ、人間は景観を作り、景観又は環境に支配されて行く。故に若し社会生活を合理化し整頓し、将来の発展を正しく指導せんとする技術が「計画」であり、都市に於けるそれが「都市計画」であるならば、此の理を覚って将来発展の指導に当たらねばならぬ。此の理、即ち人間と環境の一致、換言すれば景観的統一、これこそ美の条件でもある。都市美を云々する場合、吾々は此の美の観念を切り離して考えるはならぬ。常に生活との関聯に於いて、その表現を求む可きである」。奥井が理解するところでは景観とは表現された生活なのである。

文化景観に入る田園的景観を理解しようとするとき、奥井は、自然的風物、人工的風物とならんで、人的景相に注目している。住民の体格、性質、言語、服装、習慣、態度、動作において人的景相が理解されたのである。都市的景観へのアプローチにおいては、人的景相にあたる住民の外貌および態度などが、注目されたのである。

郊外の都市化が進むにつれて、人間も生活も景観もまったく一変するのである。

奥井復太郎においては都市現象は生活基盤、生活体制、生活理念（生活信条）というそれぞれの視点から、生活現象として、総合的に考察されたのである。奥井の総合観の極に姿を見せたもの、それが景観である。都市は社会的景観として理解されたのである。それは生活の風景であり、人間の光景だったのである。

生活において、生活とともに、生活をとおして理解される都市、都市において、都市とともに、都市をとおして理解される生活、奥井においてクローズ・アップされたのは、こうした生活であり、都市である。都市生活、都市生活者、都市景観、こうしたモチーフによって奥井の都市研究は貫かれているのである。

平凡な日常生活 *trivial round of daily life* に見出される生活のドラマと生活景観に奥井の〈まなざし〉が注がれていた。人びとの生活の情景と風景が彼の視野に広がっていたのである。

総合観は奥井の方法であり、パースペクティブだったといえるだろう。デカルトは道に従うことを方法と呼んだのである。奥井には途上風景や道路社会学をイメージするパースペクティブがあった。おおいに注目したいところである。

奥井の都市研究では風景が生きている。地図への道、風景への道がある。彼は風景への道を見失っていない。芸術／アート心がいつも燃えつづけていたところに彼のパースペ

クティヴの個性ゆたかな表情が見られるのである。

芸術と科学 — 奥井復太郎にはアートに注がれた〈まなざし〉があった。彼の都市研究はアートの心がそこで生きていた生活研究、人間研究でもあった。アートによってアルトシュタットに魅せられた男と呼ばれた奥井のバースペクティヴには、まことにみごとな展望がもたらされているのである。

#### 文献

- 奥井復太郎 1959 「都市研究への一回想」『都市問題研究』第11巻第2号『奥井復太郎著作集 第七巻』所収
- 奥井復太郎 1959 「荷風と東京 — 都市社会学の立場からみた荷風の作品 —」『三田評論』584号『奥井復太郎著作集 第七巻』所収
- 奥井復太郎 1996 『奥井復太郎著作集 第五巻』都市論（三）〔現代大都市論〕（1940年 出版）、川合隆男／山岸健／藤田弘夫監修、大空社
- ローデンバック 1892 『死都ブリュージュ』窪田般彌訳、岩波文庫（邦訳出版1988）

---

山岸健・山岸美穂 1998 『日常的世界の探究 風景／音風景／音楽／絵画／旅／人間／社会学』慶應義塾大学出版会

（やまざし たけし 慶應義塾大学文学部）